

片山洋子作 「タックン、命」

(効果音) (教室内のガヤ)

曾根田久子 ねえ ねえ、昨日のベストテン、見た？ 由美！

岡本由美 うん うん、見た 見た。やっぱり明菜ちゃんが 1 位だったね。久子は少年隊だ  
って言ってたけど。

久子 うーん。ま、そういうこともあるさ。ねえ、みどりはだれにリクエストカード出した  
の？

川内みどり あたし？ もちろんシブガキ隊！

由美 ゲ！ まだファンなの？ もうずいぶん長いんじゃない？

緑 そ！ 川内みどり様は思い込んだら一途なの。(芝居調で)乙女の純情よ！

由美 ブフ！ ヤだ、みどりったら、お芝居みたい。

久子 ところで、みどりはシブガキの中のだれのファンなの？

みどり よくぞ聞いてくれました。ジャーン。その人の名は、タックン。タックン、い～の  
～ち～！

由美・久子 (爆笑)

由美 もうたまんない。もっとやってよ！

みどりナレーション お聞きのとおりの明るい子、わたし、川内みどり。青春中学 2 年生。シブガキ  
隊がデビューした時からの隠れファンなの。いつもテレビや雑誌で見てるだけ  
だけど…。でも好きなんだ、タックン。

久子 じゃあさ、みどり。いいものを見せてあげるよ。はい、これ！

みどり え、何？ 写真？ あー!!

由美 へえー、タックンのアップの写真。これ、どうしたの？

みどり (かぶせて)どうして？ どこ？ どこで買ったの？

久子 お、落ち着いてよ。違う、買ったんじゃないよ。写したの。ホンモノの写真だよ、  
これ。

由美 え？ じゃ、スターの生写真てやつ？

みどり ホンモノって、久子はどこで手に入れたの？ こんな近くで。タックン、カッコいい  
…。(うっとり)

久子 この間のベストテンの本番にスタジオ入れたから。その時撮ったの。

みどり どうして？ 入っていいの、普通の人とか？

久子 ううん。わたしは少年隊のファンクラブに入ってるでしょ。その会員の特権かな。  
たまたま連絡が来てね。

みどり えー。いいな いいな。わたしもファンクラブに入れば近くに行けるの？

久子 そうだよ。コンサートとか、会の新聞とか、すごくいろんなこと分かるし、よくして

もらえるんだから。

由美 でもお金かかるんでしょ？

久子 そりゃあね。そう、確か、入会金と月々のとで...(F0)

ナレーション 学校の帰り道、わたしは飛ぶように本屋に走り、アイドル誌を手にした。

みどり(モノローグ) 何々？ 入会金 3000 円か。なんだ、大したことないや。これくらいなら、お父さん、出してくれるかも。ワーイ、やったぁ！

ナレーション すっかりその気になったわたしは、家に帰るとすぐ、父に相談した。

父 ダメだよ。何言ってんだ、みどり。そんなくだらないことばかり考えてないで、少しは勉強に身を入れなさい。なんのために高い月謝払って家庭教師を付けてると思ってるんだ！

みどり うん、だから勉強も頑張るからさ。3000 円だけちょうだいよ、ね？

父 ダメだな！

ナレーション ピシャリと断られてしまったわたしは、久子に電話して助けを求めた。

久子 (フィルター音)ダメよ、親に言ったって。どうせわたしたちの気持ちなんて分かんないんだから。内緒で入っちゃいなよ。悪いことしてるわけじゃないんだもん。大丈夫だよ、みどり。

みどり うーん。...そうね！ でも、お金どうしよう？ わたし、手持ちないんだ。

久子 (フィルター音)貯金は？ 自分の通帳持ってる？

みどり ああ、ある ある。でも、お母さんのタンスの中だなぁ。(きっぱりと)いいや。サンキュー。

ナレーション 自分の預金通帳とはいえ、母のタンスから出すのはあまり気が進まなかったけど...わたし、やってしまった。それからちょうど 1 週間後、久子の名前を借りて申し込んだ会員証が届いた。

みどり(モノローグ) やった！ 何々？ 新しい LP のお知らせ？ へえ、来月発売だって。「会員には予約の特権」だって！ ええと、それとね、コンサート。「今度の日曜の件があるので、特別予約」だって！ うわぁ、うわぁ、今度の日曜だって。行きたいなぁ。

ナレーション わたしはもう有頂天になっていた。タックンに一步近づいた気分。でも、そこでまた“壁”があった。コンサートのチケット代が、会員優待でも 2000 円なのだ。もう自分のお小遣いもない。でも、タックンを見たい一心のわたしは、新たな方法を考えついた。

父 ええ？ 2000 円の本？ そんなにするのか、参考書？

みどり うん。そ、そうなの。少し高いんだけどいい本だからって、家庭教師の高松先生が教えてくれたの。

父 へえ、高松先生がそう言ったのか。じゃ、間違いのないな。分かった。えーと、じゃこれ 2000 円。しっかり勉強しろよ。

みどり はーい、行ってきま〜す。

みどり(モノローグ) ドキドキした。でもやっちゃった。高松先生っていうのは、大学生でとてもまじめな人。なんでも、父と同じ教会に行ってるクリスチャンだって。だから、彼が言ったと言えば父は絶対。先生は優しいし、わたしが宿題やってなくても怒らない。ちょっぴり寂しそうに「残念だな」って言うけど。ま、いいや。ウヒョー、これでコンサートに行ける。タックンに会える。わたしのタックンに！

(音楽) (コンサート)

みどり タックンがわたしを見てる。あ、笑った！ あー、なんて幸せなんだろう。タックン、わたしだけのタックン。

(効果音) (玄関のドア)

みどり ただいまぁ。

弟健太郎 お帰り、お姉ちゃん。遅かったね。

みどり うん。由美と久子んちで宿題教わってたらさ、なかなか終わんなくて。

父 そうかぁ。久子さんから「心配ありませんから」って電話頂いてたけど、あまり迷惑かけちゃダメだよ。

みどり はい はい、以後気をつけます。

父 へー、なんだか今日は素直だね。うれしそうな顔してるじゃないか。さ、早くお風呂に入って。風邪引くといけないから...(F0)

ナレーション 父の優しい言葉に、かえってウソにウソを重ねていく自分が恐ろしかった。父からいつも聞かされていた「ウソは罪」という言葉が頭をかすめた。しかしわたしの頭の中は、タックンのことでいっぱいだった。「今度はいつ会えるだろう。」寝ても冷めてもタックンしかなかった。タックンのためなら何を捨てても惜しくない！

(効果音) (学校のガヤ)

久子 ねえ、みどり。シブガキ隊と少年隊で、今度ジョイントやるんだって。行かない？

みどり わぁ！ 行く 行く。いつ？

久子 来週の日曜日！ 名古屋で。

みどり え、どこ？ 名古屋？ 名古屋って…。

久子 うん。新幹線で行けば2時間よ。近い 近い！ ね、行こ。絶対、ね？

みどり(モノローグ) 名古屋だって。チケット代と交通費で、3万円くらいするのかな？ お金、ないよ。お小遣いはレコード買ったし。またあの手で行くか？ でも、それにしても3万円の本なんて、言えるはずないよね。でも、ああ、行きたい 行きたい。でも…。

(音楽) (暗いイメージ。次のモノローグの間、次第に高まる。)

みどり(モノローグ) あ、そうだ。あそこに、確か…。

ナレーション わたしは、そっと2階の母の部屋に忍び込み、ドキドキはやる胸を押さえながら、タンスを開けた。

みどり(モノローグ) お父さんの預金通帳が、確かここに…。どこだ、どこだ？…あ、あった！

ナレーション その時だ。

(効果音) (戸を開ける音。)

みどり(モノローグ) あ、高松先生！

みどり (ドギマギして) あ、あら先生。部屋を間違えてる。わたしの部屋はあっちの…。

高松先生 (さえぎる) 戻しなさい。元のところへ戻しておきなさい。みどり君。

みどり え、なんのこと？

高松先生 残念だよ。でも、今なら罪にならない。さあ、元のところへ。

ナレーション そう言うと先生は、わたしの手を母のタンスにずっと導いた。なぜだか力が抜け、わたしは言われるとおりにしていた。先生はわたしを部屋に連れていくと、しばらく黙っていた。それから、おもむろに辞書をわたしに手渡した。

高松先生 「アイドル」を引いてごらん。

みどり 「アイドル」？ はい。えーと(パラパラめくる音) あ、「アイドル」、ありました。

高松先生 うん、読んでごらん。なんて書いてある？

みどり 「アイドル。日本語では偶像。虚像、実体のないもの」だって。

高松先生 うん。さ、国語の勉強だ。君は前に、タックンは君のアイドルだって言ってたね。当てはめてごらん。

みどり えーと、タックンは偶像で、虚像で、実体のないもので…。どういうこと？

高松先生 君のしているタックンは、虚像。つまり偽の姿。本物の彼じゃないってことだ。

みどり 分かんない。

高松先生 岡田明子ってアイドル歌手だった子、覚えてるだろ？

みどり あ、あの自殺した子。いろんなうわさあったんだよね。かわいい顔してさ。

高松先生 ああ。アイドルも普通の人間。悩みもある。汚いところも持ってる。絶対的な存在じゃないってことさ。

みどり でも、タックンは違うわ。

高松先生 そうかな。確かに彼は君がコンサートに行けば、ファンの一人として喜んでくれるだろう。君を見てニッコリ笑ってくれるかもしれない。そこで君はワクワクするような興奮に浸るだろう。だが彼は、それ以上の何をしてくれるというんだ？… “ゼロ”だよ。君は、そんなことのために、彼を遠くから一目見ることのために、どれほど大切なものを犠牲にしてるか、気づかないのか？

みどり ……。

高松先生 お父さんは知ってるよ。君が本代を何に使ったか。君の通帳の使い道も、コンサートのことも。

みどり ええ！ 知ってたの、お父さん？

ナレーション 父を、いつも自分を信頼してくれた父の心を裏切ったという痛みが、初めてわたしの心を突き刺した。

高松先生 だれかのファンになるのは悪いことじゃない。僕だってそうだった。歌手って仕事は人に夢や希望を与えてくれるしね。ただ、その人に没頭しちゃって、何も見えなくなると、落とし穴にはまるんだ。悪魔のね。

みどり 悪魔の、落とし穴？

高松先生 うん。その人が自分のすべて。そう、絶対的な、まるで“神様”みたいな存在になっちゃうとね。まず、相手の“本当の姿”が見えなくなっちゃう。君の目に映るのは、君の頭の中で限りなく理想化された“虚像のタックン”だ。もっと恐ろしいのは、自分の本当の姿も見えなくなっちゃうことだ。ウソも、盗みも、それが罪だってことはよく知ってたろ？ でもどうだい？ “タックンに会う”という目的のためには、平気でそれをやっちゃったろ？

ナレーション わたしは、力なくうなずいた。優しい高松先生に、静かに話されると、ところどころ難しいけど、本当の自分、うん、なんて言うか、自分には見えなかった“心の中の自分”を、完ぺきに思い知らされたのは確かだった。すごいよ、高松先生。

高松先生 タックンの公演は、キッパリあきらめるんだ。その代わりに、君のお誕生日に、その時のライブカセット、プレゼントしよう。

みどり ほんと？

ナレーション わたしは思わず高松先生の顔を見た。

高松先生 さ、それじゃ、お父さんのところに行って謝ったほうがいいな。君のことを毎晩祈ってるって言ってたよ。

みどり そうする。

ナレーション なんだか、ずーっと心の中を締め付けていたものが外れて、自由になったような気がした。

みどり(モノローグ) お父さん、ごめん。神様、ごめんなさい。

ナレーション わたしは、心を込めてそうつぶやいていた。

< 完 >